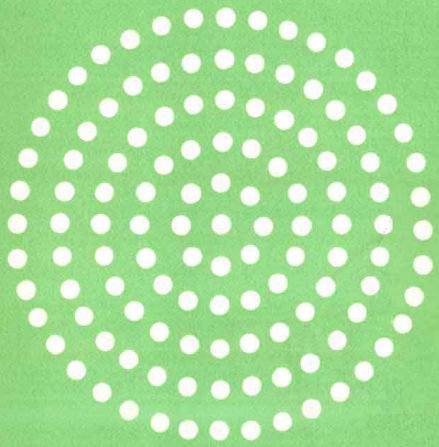
日本の詩集　10

中原中也詩集



昭和四十三年二月十日　初版発行
昭和四十九年五月三十日　七版発行

著作者　中原中也
発行者　角川源義
発行所　角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
郵東京一九五二〇八　郵一〇二
電話東京（二六五）七二一（大代表）

日本の詩集　10
中原中也詩集

印刷　カラー　暁美術印刷株式会社
本文　旭印刷株式会社
函・扉　暁美術印刷株式会社
製函　川合紙器加工所
製本　株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0392-571910-0946(2)

目次

山羊の歌

初期詩篇

春の日の夕暮　八
サーカス　一〇
朝の歌　一三
臨終　一四
黄昏　一六
帰郷　一八
逝く夏の歌　二〇
悲しき朝　二三
夏の日の歌　二四
夕照　二六
港市の秋　二七
ためいき　二九
春の思ひ出　三一
宿酔　三三

少年時

少年時　三四
盲目の秋　三六
妹よ　四一
寒い夜の自我像　四二
失せし希望　四四
夏　四六
心象　四八

みちこ

みちこ　五〇
汚れつちまつた悲しみに……　五三
無題　五四
更くる夜　五〇
つみびとの歌　六一

秋

秋　六三
修羅街輓歌　六六
雪の宵　七〇
生ひ立ちの歌　七三
時こそ今は……　七五

羊の歌

羊の歌　七七
憔悴　八一
いのちの声　八七
在りし日の歌　九二
含羞　九四
夜更の雨　九六

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

月　九六
青い瞳　九七
三歳の記憶　一〇〇
六月の雨　一〇二
この小児　一〇四
秋の日　一〇六
老いたる者をして　一〇八
湖上　一一〇
骨　一一三
秋日狂乱　一一四
朝鮮女　一一七
春と赤ン坊　一一八
雲雀　一一九
北の海　一二一
頑是ない歌　一二三
閑寂　一二五
お道化うた　一二七
除夜の鐘　一二〇
わが半生　一三三
独身者　一三四
春宵感懐　一三五
曇天　一三七
蜻蛉に寄す　一三九

永訣の秋　一四一
ゆきてかへらぬ　一四三
一つのメルヘン　一四五
幻影　一四七
あばずれ女の亭主が歌つた言葉なき歌　一四九
月夜の浜辺　一五一
また来ん春……　一五三
月の光　その一　一五五
月の光　その二　一五七
冬の長門峡　一五九
正午　一六一
春日狂想　一六三
蛙声　一六七

未刊詩篇
幼なかりし日　一七〇
雪が降つてゐる……　一七二
寒い夜の自我像　一七四
夏は青い空に……　一七六
夏の海　一七八
追懐　一八〇
夏と私　一八二

疲れやつれた美しい顔　一八四
夜店　一八六
風雨　一八八
吹く風を心の友と　一九〇
お会式の夜　一九二
蟬　一九四
いちじくの葉　一九六
或る夜の幻想　一九八
昏睡　二〇〇
別離　二〇二
朝　二〇八
初恋集　二一〇
春の消息　二一五
吾子よ吾子　二一七
桑名の駅　二一九
山上のひととき　二二一
夜半の嵐　二二三
落日　二二四
夏　二二五
砂漠　二二七
ひからびた心　二二九
夏の夜の博覧会は、かなしからずや　二三一
初夏の夜に　二三四
渓流　二三五
秋の夜に、湯に浸り　二三七
一夜分の歴史　二三九

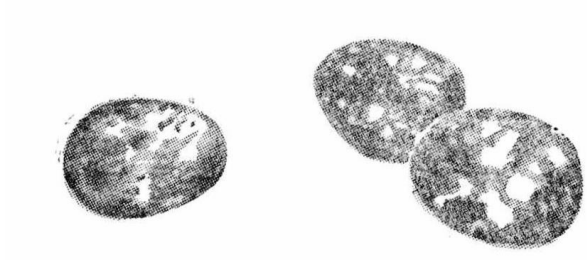
解説

評伝　大岡信　二四二
鑑賞　吉田精一　二五二
詩の旅　大竹新助　二六七
年譜　二六九

写真協力　植田正治・中村昭夫・布施正直
緑川洋一・オリオンプレス

中原中也詩集

山羊の歌



春の日の夕暮

トタンがセンベイ食べて
春の日の夕暮は穏かです
アンダースローされた灰が蒼ざめて
春の日の夕暮は静かです

吁！　案山子はないか――あるまい
馬嘶くか――嘶きもしまい
ただただ月の光のヌメランとするまゝに
従順なのは　春の日の夕暮か

ポトホトと野の中に伽藍は紅く
荷馬車の車輪　油を失ひ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

私が歴史的現在に物を云へば
嘲(あざけ)る嘲る　空と山とが

瓦(かはら)が一枚　はぐれました
これから春の日の夕暮は
無言ながら　前進します
自(みづか)らの　静脈管の中へです

サーカス

幾時代かがありまして
　茶色い戦争ありました

幾時代かがありまして
　冬は疾風吹きました

幾時代かがありまして
　今夜此処での一と殷盛り
　今夜此処での一と殷盛り

サーカス小屋は高い梁
　そこに一つのブランコだ
見えるともないブランコだ

頭倒さに手を垂れて

汚れ木綿の屋蓋のもと
ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

それの近くの白い灯が
安値いリボンと息を吐き

観客様はみな鰯
咽喉が鳴ります牡蠣殻と
ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

屋外は真ッ闇　闇の闇
夜は劫々と更けまする
落下傘奴のノスタルヂアと
ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

朝の歌

天井に　朱きいろいで
　戸の隙を　洩れ入る光、
鄙びたる　軍楽の憶ひ
　手にてなす　なにごともなし。

小鳥らの　うたはきこえず
　空は今日　はなだ色らし、
倦んじてし　人のこころを
　諫めする　なにものもなし。

樹脂の香に　朝は悩まし
　うしなひし　さまざまのゆめ、
森並は　風に鳴るかな
ひろごりて　たひらかの空、

土手づたひ　きえてゆくかな
うつくしき　さまざまの夢。

臨終

秋空は鈍色にして
黒馬の瞳のひかり
　水涸れて落つる百合花
あゝ　こころうつろなるかな

神もなくしるべもなくて
窓近く婦の逝きぬ
　白き空盲ひてありて
　白き風冷たくありぬ

窓際に髪を洗へば
その腕の優しくありぬ
　朝の日は澪れてありぬ
　水の音したたりてゐぬ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com